

# 令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

## 事業実施報告書

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| I   | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び   |
| II  | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成           |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築        |
| IV  | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V   | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成      |

道府県・政令市名【長野県】

学校名【長野市立篠ノ井西小学校】

1 実践テーマ	①・II・III・IV・V（複数選択可）
2 実施対象者 (学年・人数)	小学生  (6学年 33人)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (総合的な学習の時間) ② 行事名 ( ) ③ その他 ( ) (2) 地域における活動 ① イベント名 ( ) ② その他 ( )
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内の姉妹学級（1年生）や全校から希望者を募り、ボッチャのルールや魅力を広め、交流を通じてオリンピック・パラリンピックについての理解を深める。</li> <li>・障がいのある方への理解を深め、よりよい社会を築く基礎的な考え方を身につける。</li> </ul>
5 取組内容	 <p>1 「ボッチャで姉妹交流」                  昨年度からクラスで取り組んでいたボッチャを知ってもらいたいと願い、姉妹学級の1年生と交流会を行った。                  学級会で事前に必要な係を考え、チームぎめ、ルール説明、コート作成、得点審判、司会、放送の各係を決め、係ごとに事前準備を行った。                  交流会当日は1年生と6年生がペアとなり、チームに分かれて対戦した。「こうやって投げるんだよ」と手本を示すと、1年生もすぐに理解し、だれもが楽しめるボッチャの魅力を味わえた。</p> 



2「ボッチャを全校に広めよう」  
 全校の人にボッチャをより知ってもらうために、教室の廊下や多目的室にボッチャの簡易コートを作成した。放送で全校に呼びかけ、休み時間に希望者がボッチャを体験した。

より手軽に楽しめるようにルールを変更することで、限られた時間で多くの人がボッチャを体験し、楽しんで取り組めた。



3「加藤先生から学ぼう」  
 子どもたちはボッチャを全校で紹介する中で、障がい者やパラリンピックについて詳しく知りたくなった。インターネットで調べ、知識としての理解は深まったが、すっきりしなかった。そこで実際に障がい者の方からお話を聞きたいと願い、加藤正先生にお越しいただきお話を伺った。



子どもたちは、加藤先生のお話から、「自分だったらと考えるのではなく、相手がどう思うかを考えることを話していただいた。今までは逆だったのでこれからは相手のことを考えたい」「健常者、

障がい者とわけて考えるのではなく、同じ人として関わっていきたい」などの感想をもち、改めて障がい者やパラリンピックについての理解を深めた。

	<p>2「ボッチャを全校に広めよう」          全校の人にボッチャをより知ってもらうために、教室の廊下や多目的室にボッチャの簡易コートを作成した。放送で全校に呼びかけ、休み時間に希望者がボッチャを体験した。</p> <p>より手軽に楽しめるようにルールを変更することで、限られた時間で多くの人がボッチャを体験し、楽しんで取り組めた。</p> <p>3「加藤先生から学ぼう」          子どもたちはボッチャを全校で紹介する中で、障がい者やパラリンピックについて詳しく知りたくなった。インターネットで調べ、知識としての理解は深まったが、すっきりしなかった。そこで実際に障がい者の方からお話を聞きたいと願い、加藤正先生にお越しいただきお話を伺った。</p> <p>子どもたちは、加藤先生のお話から、「自分だったらと考えるのではなく、相手がどう思うかを考えることを話していただいた。今までは逆だったのでこれからは相手のことを考えたい」「健常者、障がい者とわけて考えるのではなく、同じ人として関わっていきたい」などの感想をもち、改めて障がい者やパラリンピックについての理解を深めた。</p>
<p>6 主な成果</p>	<p>一人一人が障がいのあることについて深く考え、これからもよりよく生きていこうとすることや、障がいのある方とどのように関わればよいかについて体験的に学び、自分事として考えた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・オリンピック・パラリンピックの対する興味関心の向上</li> <li>・オリンピック・パラリンピックに対する知識量の増加</li> <li>・ハンデキャップにとらわれない共生の考えの根付き</li> </ul>
<p>7実践において工夫した点(事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運動委員会や学級でボッチャのことを紹介したり、ミニコートを作ったりして、だれもがいつでもボッチャを体験できるようにした。</li> <li>・低学年・中学年・高学年で校舎が離れているが、全校にボッチャのことを知ってもらうために、校内放送を活用した。</li> </ul>
<p>8 主な課題等</p>	<p>コロナ禍により、当初予定していた高齢者や福祉施設の方との交流ができなかった。ボッチャに親しむだけでなく、ボッチャを通してパラリンピック・障がい者理解を体験し、そこで感じたことを次に活かす、生きた学びにつなげたい。</p>
<p>9来年度以降の実施予定</p>	<p>5年生で総合的な学習の時間にボッチャを行い、福祉教育と関連づけて実施していく予定。</p>

